

視線交錯の認知に及ぼす要因

○山内裕斗・安藤美華代
(岡山大学)

問題と目的

視線の交錯（アイコンタクト）は日常生活を送るうえで様々な機能を有している。視線交錯の研究は、二者間の実験による研究が多くなされている中、山内・田邊（2021）はどれだけ人と目が合うと思うか、という認知面に注目して研究を行い、重回帰分析から完全性追求や外向性、拡散的好奇心との関連を報告している。

本研究では山内・田邊（2021）を参考に、視線交錯の認知面に関連する要因を探ることとする。

方法

所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得た後（番号：社_2023_01）、2023年6月、大学の講義時間内で大学生を対象に質問紙調査を行った。分析対象は235名（男性112名、女性123名、平均年齢19.6歳）であった。質問紙では、①学年、年齢、性別、②全般的な普段の視線認知に関する項目として山内・田邊（2021）を参考に、「人とよく目が合うと思う（視線交錯）」「普段、周りの人をよく見ていると思う」「普段、よく周りの人から見られていると思う」という3項目、③日常場面での視線認知の項目として、山内・安藤（2022）より作成した5つの日常場面（すれ違い時、信号待ち時、買い物時、外食時、列に並んでいる時）それぞれについて、他者を見ている認知の程度とその時の感情（快—不快）、他者から見られている認知の程度とその時の感情（快—不快）、④社交不安の尺度である金井他（2004）のSocial Phobia Scale（SPS）とSocial Interaction Anxiety Scale（SIAS）の日本語版、⑤菅原（1984）の自意識尺度について尋ねた。③の日常場面での認知および感情については、5つの場面の合計得点を用いた。

結果と考察

まず視線交錯の認知と他の変数との相関を検討した（Table1）。全般および日常場面での見ることと見られることとの相関が確認された。一方で視線交錯と社交不安との相関はほとんど見られず、社交不安の高さと視線交錯の認知の関係は、明らかにはならなかった。推測の域は出ないが、社交不安が高い者は他者の視線を気にするものの、自分からは他者を

見ていないために視線交錯を認知しにくいことが考えられる。

次に視線交錯の認知に関連する要因を検討するため、視線交錯の認知を目的変数とし、有意な相関が得られた公的・私的自意識、全般および日常場面の見ることと見られることを説明変数とし、ステップワイズ法による重回帰分析を行った（Table2）。その結果、視線交錯には全般の見ることと見られること、日常場面の見られることが有意に関連していた。視線の交錯には普段他者を見ていると認識しているほど、普段も日常の特定の場面でも他者から見られていると認識しているほど、人とよく目が合うと認識していることが示された。

本研究では5つの日常場面を合わせて分析を行っており、それぞれの場面での特徴は把握できていない。今後は、日常場面での詳細な検討が必要であると考えられる。

Table1 視線交錯の認知と他の変数の相関分析結果

	視線認知（全般）		視線認知（日常場面）		社交不安		自意識			
	見ること	見られること	見ること	見られること	SPS	SIAS	公的	私的		
視線交錯（全般）	0.426***	0.396***	0.275***	0.054	0.383***	-0.054	0.089	0.024	0.187**	0.147*

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table2 視線交錯の認知を目的変数とした重回帰分析結果

説明変数	目的変数：視線交錯（全般）	
	標準偏回帰係数（ β ）	
見ること（全般）	.363***	
見られること（全般）	.193**	
見られること（日常場面）	.267**	
R^2	.292	
adj R^2	.283	

** $p < .01$ *** $p < .001$

主要引用文献

- 山内裕斗・安藤美華代（2022）。「見られている」と感じる場面と気持ちの分類 日本認知心理学会第20回大会発表論文集、P1-B07.
- 山内裕斗・田邊敏明（2021）. 視線に関する不快感情に及ぼすポジティブおよびネガティブな性格特性 山口大学教育学部研究論叢 70, 27-33.

付記

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2126 の支援を受けたものです。